京都大学新聞
学生団体
京都大学新聞社
京都市左京区吉田
京都大学構内
京都 ⑦8111 学内 ⑦2054 直通 2441
振替・京都3909
（1部 20円）

学園評論

最終段階へ向う教育再編

中教審ー国大協路線の意味

六月十五日、中教審は最終答申を提出し、相次いで二十四日、国大協による「自主改革」の構想が報告された。

日本帝国主義の72年沖縄返還をメルクマールとしたアジアへの政治ー経済的進出の本格化の中で、国内の総領域にわたる分業秩序の帝国主義的再編が遂行されんとしている現下、この中教審ー国大協自主改革両路線を軸として教育再編の最終的完成が行なわれようとしている。

われわれは、68〜69年全国教育闘争の意義と限界を対象化する中で、再度の教育闘争の爆発に向けて胎動化しつつある学生戦線の闘いの方向性を鮮明にする事が今こそ問われている。

今回、以下主要に展開するのはその第一歩として、中教審ー国大協自主改革路線の批判を通しブルジョアジーによる教育再編を把握する場合の基本的視点の提起であり、攻撃の内容の分析である。

……一……

ドル・ボンドの国際通貨体制の危機が端的に表現した60年代中期の世界資本主義の構造的不況への突入の中で、日本においては近代的生産体制ー大工場制度下での安定成長は終焉し、国内での過当競争、利潤率の低下ー即ち資本の労働力に対する相対的過剰・国内市場の限界の中で過剰生産の相を呈して来た。日本資本主義は、既に55年より民間設備投資を中心とした生産体系の改編ー基幹部門への資本と労働力の集中投下・急激な技術革新ーを第二次合理化として貫徹して来たが、この60年代の構造的危機の突破の方策は労働効率向上を主眼とした第三次合理下によって展開されて来た。即ち、先立つ民間部門の改編によって隘路部門と化した公的部門（公共企業現業部門・医療等）の合理化が進行し、その結果として創出される旧中間層の没落と失業者＝過剰労働力商品を背景として職場内再編・職場秩序労働過程の再編たる第三次合理化（労働効率向上を目的とする改編）が進行して来たのである。そして、それらの産業再編成ー合理化は、現在では国家の総資本的立場からの七十年代長期にわたる産業構造ー基盤の根底的整備計画（流通過程の整備・産業部門の統廃合）として、より大きな規模で新全国総合開発計画に収約されている。

他方、政治過程においては、対外的には海外市場圏の拡大と後進国の反革命的共同開発の政治的・軍事的条件としての70年アジア太平洋圏安保（沖縄の日米共同反革命前線基地を枢要なファクターとして孕む）の全面発動による反革命外交路線が推進され、国内的には激化する階級闘争への治安弾圧を主軸とする階級闘争への治安弾圧機構の再編強化が実施され、これに伴い帝国主義ナショナリズムの強烈な鼓吹による国民統合政策がとられているのである。

教育の帝国主義的再編は、以上見て来たような日本資本主義総体の帝国主義的再編の一環として行なわれている。

帝国主義段階における「公教育」の意味が「労働力の保全」にあることをおさえるなら、七〇年代の一連の教育政策は、日本資本主義の再生産構造の変化に対応した労働力＝工業技術者を質量ともに確保しようとする労働力養成政策として位置づけられる。

われわれは、こうした背景を明らかにした上で、中教審最終答申の分析から政府ブルジョアジーの教育再編の内容を抽出する。

……二……

中教審最終答申に見られる教育再編のポイントは次の五点に絞られるだろう。即ち、

第一に、教育の多様なコース別化と能力主義である。それは、初中等教育における一貫教育の徹底化と将来の進路選択の鑑別・指導の緻密化、高等教育においては産業構造に見合った目的別複線化（五類型）、更に高専をその他の専門分野、目的に拡張することで行なわれようとしている。大学に関しては、この複線化は制度の改訂こそなされてないが既に現実的に私立大学の乱造とマス・プロ化是認をもって進行しており、中等技術労働者の大量確保が行なわれている。そして未だ実現していないのが、高度の学問研究と研究者、高級技術労働者の大量養成であり、従って大学の種別化という場合、必ず出て来るのが大学院大学なのであり、今回の答申はこうした事実の最終的確認である。

第二に、公教育の内容水準維持向上と普及であり、これは、定時制・通信教育の充実による再教育ー生産教育制度の整備、更に幼稚園教育の充実と将来的義務化による就学年令引き下げとして具体化されている。

第三に、研究・教育機能の分離であり、具体的には各管理機構の分離を通して進められ、更には大学院大学・研究院設置が策定されている。（筑波研究学園都市構想はその先取りとしてある）これは、研究と教育の分離を通した両者の合理的再編・効率化を図る中で、研究を国家ー産業との直接的連携の強化ー自主技術開発体制へくみこみ、教育を産業の要求する労働力商品の再生産過程として緻密化するものである。（教育ー養成の同義語化）

第四には、新教特法と共に教育労働者の「専門職」意識に沿った養成が、教員養成大学の整備充実、大学院の再教育機関創設、「試補」制度による特別訓練を具体的政策として行なわれようとしている。

第五に、管理ー運営体制の整備である。これは、全国教育闘争の圧殺ー収拾過程の「非常事態」の管理体制の教訓を元にしたもので、大学における学長を中心とした管理機関の全学的整備とそれへの権限集中ー即ち、副学長を含む管理機関の専門化と拡充、教授会評議会等の審議機関の権限縮少、執行機関の大幅な自由裁量権ーとして行なわれ、更には学外者（政府・財界）を含む管理機関の設置も目論まれている。この管理ー運営体制下で同時に教育再編は学内で具体的に展開されていくのである。

それでは、こうした教育の機構的再編を通した政府・ブルジョアジーの教育再編の意図は

第一に総資本の要請に見合った総体としての「産学協同路線」の教育過程における全面的貫徹であり、第三次合理化に見合った高級労働力商品＝多様な技術労働者の効率的生産である。

第二に、学校ー社会教育を貫く労働力管理政策として、資本に対する相対的労働力不足のカバーのための若年労働力早期確保（就学年令引き下げ）、技術革新に見合う労働の質的向上（再教育制）が図られようとしている。

第三には、開放経済体制下の国際競争力強化の基礎条件たる「自主」技術開発体制の確立である。

即ち、所謂「開放体制」下にあっては国際的資本間競争は技術的優位を基礎とした生産性格差によって争われ、また後進国市場への一支柱が技術提供である以上、海外市場確保を至上目的とする日帝は従来の技術導入依存型の本質を改善し技術格差を埋めるべく自主技術の開発を迫られているのである。このため、政府は従来の無政府的独占間研究投資競争を調整し、大学・国立試験研究所・企業内研究施設の相互協力を促す中で国家的視点に立った総合的科学技術政策を樹立しようとしているのである。教育再編の中での研究ー教育の機能分離を通した研究の高度化、大学院大学・研究院設置はその礎石である。

第四に、教育管理体制の確立である。今回の最終答申は今までの分析で明らかなように、政府ー財界ー教育過程の一元的系列化による国家の大学への政策貫徹を主眼としており、それは、財政誘導による国家主導型の教育再編を明示している事からも明らかである。

管理体制の強化は、こうして国家から国民の名において与えられた教育研究の課題を有効に実現しようとする目的に沿って〝教育〟を秩序づけていくものとして管理が緻密化されているのである。これは同時に教育労働者の統合も内包し、新教特法等を媒介とした教育労働者の専門職意識の形成（産業教育技術者化）と労働者性剥奪という攻撃を重大な契機として押えておかねばならない。

第五には、教育再編の総括的意図ーとりわけ近代化路線の核心として、教育過程における階層分断的支配関係の確立が目論まれている。即ち、教育過程において既に自らの未来的存在形態を選別するという形でブルジョア社会の階層分断的支配関係を幼稚園から大学を貫らぬく教育過程に構造化する中で競争と分断を通した支配体制をもってブルジョア的感性を育成していくものとしてあるのである。これを大学において見ればいわゆる従来の「大学共同体」から「大学目的社会」への転変として、既存の大学の社会的機能（＝労働力の養成）のためにという全構成員の「合意」を前提に管理・運営される「目的社会としての大学」が純化形成されようとしているのである。

また、この事と関連した副次的な問題として、大学政策における国公立と私立大学の跛行性の拡大の下近代的身分性が先行的に教育過程で確立され、とりわけ財政的に私大における大衆収奪の強化が進行する。（答申で提出されている私大ー国立大間の財政的是正格差も、労働力養成上重要な部門にのみ私大に援助で出るのみで根本的には変わりない）

……三……

中教審路線を「批判」する形でその政治性に反発しつつ提出された国大協自主改革構想に対する批判の核心は、教育を成立さす諸関係（大学の社会的存在論）の対象化を捨象し外観的「中立」という形での（それは実は教育の階級性を支える主軸である！）改革路線をもって、政府の設定した大枠に沿った現場における教育再編の貫徹主体であり、再編の本筋である事を指摘する事で尽くされている。

われわれは68〜69年全国教育闘争における国大協の闘争圧殺策動を引くまでもなく、62年大管法闘争における「勝利」＝法制化阻止が、実は大管法の実質化としての国大協自主規制路線＝「敗北」を生んだ事を想起するだけで充分である。

中教審路線に対する闘いは、従って一般的な政策反対闘争ではなく、現実の個々の再編過程に迫るものとして恒常的に展開されなければならない。

現在、京大医学部では、中教審路線の先取りとしてのカリキュラム再編に抗し三ケ月にわたる無期限ストが闘い抜かれ、他方理・工学部を中心に臨時職員の近代的身分制に対する闘いが展開され、各学部での学生のスト権・団交権の獲得をめざした闘争が組まれている。われわれはこうした闘いの発展の方向性を、68ー69年教育闘争の敗北の総括の中から導き出さねばならない。

即ち階級関係のブルジョア的総括としての国家の総資本的立場からする諸階級の抑圧政策への闘いへと、大学立法粉砕闘争を経る中で政治的質を獲得しつつ発展していった教育闘争が、にもかかわらず自然成長性の枠内で階級的政治闘争と結合しえず、全共闘運動が闘いの根源的解決に向けて自ら権力主体を志向しつつも個別撃破されていった過程は、学生存在の市民的属性の止揚と、運動の対象領域の拡大（地区ー産別的結合、労働者運動との実践的結合）、社会闘争における目的意識性の措定を突き出していった。こうした課題を、現在的に展開されている権力闘争をめぐる戦略論争のレベルでとらえ返すことが、胎動しつつある再度の教育ー学園闘争の大衆的ー革命的発展を用意するものであることを確認しておきたい。

クラスコンパに
ご相談承ります
旅館 きよす
寺町通今出川上ル
TEL (231) 5121・5122

□今週の紙面□
（7月12日号）
1面 ▼教育闘争シンポジウム
2面 ▼解体されず残るもの—高橋和巳の苦闘の後に
（7月5日号）
3面 ▼ゴーデスベルグ綱領への道〈最終回〉
4面 ▼プロレタリア革命の軍事問題

佐藤訪韓阻止へ決起

反帝潮流の階級的前進へ

深化する亀裂の中で

再編すすむ入管戦線

佐藤首相の訪韓阻止闘争が、全国全共闘分裂下で闘われた。沖縄返還協定調印阻止闘争を「返還粉砕」のスローガンを掲げて闘った部分は、反戦四世話人呼びかけという形で決起し「反帝闘争の階級的前進」という意志統一の獲得をめざした。

このような戦線の再編に入管闘などの課題別実行委の運動がいかに応えていくかが大きな焦点となっている。

また、権力の弾圧が、自警団を動員しての本格的な反革命体制下の弾圧へと強化されてきていることは見のがせない。

七月一日の佐藤首相の韓国訪問を前にして、六月三十日に訪韓実力阻止へ向けた集会とデモが東京礫川公園など都内各所で行なわれた。

礫川公園では、東京反戦世話人四氏（寺田、西田、早瀬、樋口）呼びかけによる「6・30労学中央総決起集会」と、東京入管闘地区実の総決起集会が約千五百名を結集して行なわれた。

また、中核派、第四インター系は阪本公園で約五百名を結集して集会を行なった。

当初、6・30集会は東京入管闘、各派反戦世話人などで実行委を設けての統一集会への動きもあったが、この間の戦線の決定的亀裂の進行と党派闘争の激化の中で、意見がまとまることはなく、統一集会が行なわれなかったばかりか、さらにその亀裂は深まることになった。

それは、東京入管闘が提起していた明治公園での集会に対して、中核派が阪本公園での集会を設定したことと、二十五日に行なわれた東京入管闘の主催の佐藤訪韓阻止闘争へ向けた討論決起集会に中核派が武装して「介入」して「会場制圧」して解放派、反帝戦線の入場を阻止したことを直接的契機として、中核派・第四インター以外の部分は、これを「東京入管闘の分裂策動」と「集会破壊」だとして、自己批判を要求したため武装対決状態になっていた。

一方、警視庁は、返還協定調印阻止闘争の際の爆発物の使用を口実にして、夜間デモ禁止措置を打ち出し、公安委員会は、明治公園の集会を許可しないという弾圧体制を敷き、前日になって礫川公園に場所を移して許可した。

礫川公園には、当日早朝から、公園に隣接した中大理工に結集した全学連（内城委員長・三百）、反帝学戦（フロント派・百五十）、反帝戦線（共労党系・五十）、赤色戦線（理戦派・七十）の行動隊が一斉に五時過ぎに入り、直ちに公園入口に竹竿部隊を配置して、「中核派・第四インターの介入による集会破壊からの防衛」の態勢をとった。

一方中核派は一時、礫川公園に向う姿勢を見せたが、六時過ぎに当初の予定の阪本公園に向い、その段階でその日の武装衝突の可能性は一応なくなり、部隊は全て集会会場へ入った。

その間、各党派、東京入管闘各地区実、べ平連、職場産別反戦などの隊列が続々と結集して、公園は全体で約千五百の人で埋まった。

集会は、六時半過ぎから、四世話人呼びかけの「6・30佐藤訪韓阻止労学中央総決起集会」と東京入管闘地区実の集会が並行して開かれた。

当日の統一ビラによって、「佐藤訪韓実力阻止、72年沖縄返還粉砕・自衛隊派兵阻止、安保粉砕・四次防粉砕・入管体制粉砕」を掲げ、反帝闘争の階級的前進を勝ちとることを確認した四世話人呼びかけの「反帝派」の集会は、四世話人の司会で始まり、全学連（内城委員長）、反帝学戦、赤色戦線、共学同、反帝戦線の各参加団体から発言が行なわれた。

発言ではそれぞれ、七月一日の佐藤の訪韓を朝鮮人民と連帯して実力で阻止する決意を表明し、日韓台米を貫く国際反革命体制の、さらなる打ち固めに対して闘い抜くべく、一切の人民戦線派への転落を粉砕しての戦線の飛躍を通して、反帝闘争を国際的・階級的に発展させることが訴えられた。

東京入管闘の集会は、この集会の近くで独自に行なわれ、東京入管闘の事務局の横井氏が基調報告を行ない、「韓国学生の決起と連帯した佐藤訪韓阻止闘争のいま一歩の飛躍をもたらすものとして闘われなければならず、そのためにも党派闘争が入管闘争を発展させる形で展開させれなければならない」と述べ、さらに「新入管法の再上程を阻止する不断の闘いを地区実運動をもって闘い抜くこと」が述べられた。

その後各地区実、大学入管闘から闘いの報告と決意表明が行なわれた。

八時半には両方の集会が終了し、東京入管闘の部隊を先頭にして、日比谷公園までのデモが、権力の機動隊の大動員と装甲車、放水車まで用意した厳戒状態を突破して、戦闘的に行なわれた。

阪本公園での中核派、第四インターなどの集会は、午後七時から約五百名を結集して行なわれた。

沖青委、全学連（金山委員長）、学生インター、国際主義高校戦線、反戦高協の順で発言があり、それぞれ、佐藤訪韓阻止の闘いは「67年10・8闘争」と比するべきであり、「激動の六カ月」を開始すべく、南朝鮮人民の闘いに呼応して日帝の朴かいらい化・南朝鮮の再植民地化による延命を許さず、なにがなんでも佐藤訪韓を阻止しようと訴えられた。

その後、日比谷公園までデモを行なった。

沖縄返還協定調印阻止闘争を通じて鮮明化されてきた革命路線の分岐と戦線の亀裂は、その両極としての中核派と解放派との党派闘争として現象しつつも、六・一七闘争の四世話人の呼びかけによる七派、十一大学共闘の共同行動の実現以後、愛知訪沖阻止、佐藤訪韓阻止闘争を通して、全階級戦線へ波及しつつあるといえるだろう。

現地闘争を貫徹する

地域ぐるみの厳戒の中で

七月一日、佐藤首相の、朴大統領就任式出席を沖縄返還協定調印後の、日米韓台反革命体制のうち固めに向けた更なる攻撃の一環であるとして、その日早朝、羽田付近で、実力阻止をめざした二つの集会と、デモが、権力の戒厳令とも言える弾圧体制の中で闘い抜かれた。

まず、解放派、フロント派などを中心とする「返還粉砕派」は朝六時、東蒲田公園に約七〇〇名を結集し、「佐藤訪韓阻止総決起集会」を開いた。

結集した各戦線のアピールは、いずれも、その日の佐藤訪韓が、自衛隊幹部を伴ない、また、日本の公安警察が「韓国」の治安維持のため事前に派遣されていることなど、まさに日韓反革命体制の強化そのものであることにふれ、この訪韓は阻止されねばならぬと発言した。

赤色戦線は、「朝鮮人民が自らの解放をかけて、佐藤来韓反対闘争を闘っている。これに呼応して日本でも訪韓阻止闘争の爆発と、七日四日、自衛隊沖縄派遣団結成大会粉砕闘争をもって、東アジア革命の突破口を切り拓こう」と提起した。

続いて、反帝学生戦線からは、「プロレタリア国際主義の旗の下南朝鮮人民の反日・反朴・反米闘争に連帯し佐藤訪韓を阻止する。革共同中核派に見られる中間主義日和見主義を粉砕して全国全共闘、全国反戦の革命的飛躍をかちとろう」との発言があった。

反帝戦線（理論戦線派）に続いて、全学連（内城委員長）がたち「日韓台米を貫いて進行する反革命臨戦体制の現段階としての佐藤訪韓を断固阻止する」と決意を述べ、集会をしめくくった。

この日、機動隊の弾圧は激しく、解放派の旗ざおのほとんどが事前に奪いとられたほか蒲田駅などで、厳しい検問が行なわれた。

デモに対しての弾圧も厳しく、歩道を歩く人々も規制され、隊列の中に押し込まれ、歩道を歩くことをたびたび阻止された。完全なサンドイッチ規制の中、デモ隊は太田区民広場まで、約六キロのデモを貫徹した。しかし、圧倒的な機動隊の前に、隊列は阻止線突破を試みることさえできなかった。

東京入管闘は、この日、同じ東蒲田公園で別集会を開き、デモの最先頭で闘った。全国全共闘の分裂に頂点的に表現される階級戦線の再編の中で、入管闘のような課題別実行委員会が、どのような方向と位相で、この再編期に応えるかが注目される。

一方、中核派、第四インターを中心とする部分は早朝、本羽田公園に約四〇〇名を結集「佐藤訪韓阻止中央総決起集会」を開いた。

全学連（金山委員長）の決意表明をかわきりに、各戦線からの発言がつづいた。

第四インターは「南部朝鮮人民と固く連帯し、右翼日和見主義ブロックの敵対を断固はねのけ、佐藤の訪韓を阻止するまで闘い抜こう」と述べた。

反戦青年委からは、「帝国主義の延命をはかるものとしての日帝の佐藤訪韓の意図を暴露し、右翼日和見主義、排外主義者、社会党解放派、フロント、ブントの敵対を糾弾し、六七年一〇・八羽田闘争以上の決意をもって、何がなんでも佐藤訪韓を阻止しよう」との発言があった。

各発言の最後に、沖青委が発言にたち「日帝のアジア侵略を内乱に、のスローガンの下、断固として闘い抜こう」としめくくって、インターと、シュプレヒコールののちデモに出発した。

この集会に対しても権力は強力な弾圧を加え、検問が極めて厳しく実施される一方、旗ざおもその持ち込みが阻止された。デモは、厳重な機動隊の警戒の中を、蒲田東公園まで貫徹されたが、実力闘争は一切展開し得なかった。

この日の闘争は、前日に引き続き、全国全共闘の路線上の亀裂を体現して、二つの集会として闘われたが、東京入管闘の対応など、戦線再編が、課題別実行委にも波及しはじめているのを見てとることができた。

一方権力の弾圧は厳しく、規制はついに歩道にまで及び、六九年秋期決戦に反革命として登場した地元自警団の組織化も一層進んでおり、商店街はのきなみシャッターをおろし、露路ごとに、数人づつの黄色い帽子をかぶった自警団員が立って警戒するなど、下からのファシズムともいえる反革命体制が公然と登場した。

自警団も登場しての厳戒の中でデモが行なわれた。

各潮流、全国大会の開催へ

え、七月初めから中旬にかけて、各潮流の政治集会、全学連大会が予定され、今春期の沖縄、三里塚入管闘争の総括から、今秋の返還協定批准国会、三里塚二次強制収用などへむけた意志一致がかちとられんとしている。

まず、十二日から十五日にかけて、全学連（洞田委員長＝革マル派系）第三十一回定期全国大会が豊島公会堂で、十五日から十七日にかけては全学連（金山委員長＝中核派系）第三十回定期全国大会が、そして十六日から十八日には全学連（内城委員長＝プロ統派系）定期第二十三回大会が東大駒場で予定されている。さらに、十七日、十八日の二日間にわたって日本反帝戦線（理論戦線派）第二回大会が行なわれようとしている。

「返還協定」を説明

七月一日 佐藤・朴会談で

七月一日、早朝からの実力阻止闘争にもかかわらず佐藤首相は朴韓国大統領の三期目の就任式に向け羽田を飛びたった。

就任式には、佐藤首相をはじめアグニュー米副大統領、チャン・チエン・キエム南ベトナム首相ら参加した。

さらに就任式前、佐藤首相は、朴大統領と約一時間にわたって会談した。

会談で佐藤首相は沖縄返還協定の日米間交渉経過と内容を説明し、「軍事技術の進歩や緊張緩和政策などによって、沖縄返還が韓国の安全に脅威をもたらそうとは思われない」と述べた。

これを了解した朴大統領からは中国問題について、中国が今秋には国連参加が認められることは確実だとして、「台湾については慎重に考えていくべきだ。しかし中国が平和外交の確証を示せば米中間、日中間の正常化が期待できよう」という発言がなされた。

さらに日本韓国間の経済協力について朴大統領から地下鉄建設に関する三千万㌦の円借款と日本米二十万㌧の緊急追加導入の要請があり佐藤首相は前向きに検討すると答えた。

解説 ニクソン・グアムドクトリンに基づく在韓米軍の削減は、国内経済不安の上にたつ朴軍事ボナパルティズム政権の維持を不安なものとしている。フォーカスレティナ作戦につぐ今年三月のフリーダムボルト作戦は、沖縄基地を中継点としつつ米軍の機動力を最大限使っての反革命支配の新たな型態であると把握できる。

日韓条約締結（六五年）をもって、東南アジアへの反革命的進出を公然と宣言した日帝は、今、七二年沖縄返還をテコとして、本格的な、アジア・太平洋圏の反革命盟主として登場しようとしている。

PATO・PAFTA構想として日帝ブルジョアジーの描く七〇年代アジア支配構想は、国内、国際分業体制の再編と反革命階級同盟の飛躍的な再編強化としてなされんとしており日韓台米四カ国閣僚会議は、その一過程として位置付けられる。

「日米防衛協定」調印される

沖縄派兵 七二年七月までに完了

日米両政府は二十九日午後、外務省で今年はじめての日米安保協議会をひらき、「日本国による沖縄責務の引き受けに関する取り決め」に合意し、署名した。これは、沖縄の施政権返還後の沖縄防衛をめぐって、沖縄への自衛隊配備計画と、日本側がひきうけるべき防衛任務を規定した、両政府間の協定で、「日米防衛協定」といえるものである。

内容は①日本は沖縄の陸上防衛・防空・海上しょう戒・捜索・海難をひきうける②自衛隊の沖縄への展開は、七十三年七月一日以前の最も早い日に完了する。復帰後六カ月までに三千二百人を移駐する③那覇空港に配備するF104Jジェット戦闘機による緊急発進態勢は復帰後六ケ月以内に行うーなどが骨子。

いずれもこれまでにも明らかにされたものであるが、施政権返還後の沖縄防衛について、日米両政府が公式文書で沖縄米軍基地機能の自衛隊による一部肩がわりを確約したことは、日米両帝国主義ブルジョアジーの同盟関係が再編されつつ、基地機能を維持してゆくことを、双方が明文で保証したものといえよう。

この日の協議委には日本側から愛知外相、中曽根防衛庁長官、米側からマイヤー駐日大使、マッケーン太平洋統合軍司令官などが出席した。

まず愛知外相、マイヤー大使が「返還協定調印後、初の会合がひらかれることは大変喜ばしい」とあいさつした。その後マッケーン司令官が極東を中心とする世界軍事情勢について述べ、中曽根長官が沖縄防衛に関する日本政府の方針と自衛隊の配備計画について発言し、合意の後、取り決めに署名した。

現地で配備反対闘争へ

沖縄返還後の自衛隊派兵をスムーズに行うため二十八日から訪沖している防衛庁の沖縄基地調査団は、返還後自衛隊が米軍からひきつぐ基地や施設を調査しているが、その一方、糸満町など関係各市町村を訪れ、基地施設の提供についての協力を求めている。

これに対し、豊見城村では又吉村長がはっきりと「瀬長島を使うことは絶対許せない。自衛隊の配備には反対である」との意志を表明し、沖縄人民による「自衛隊配備阻止」のたたかいが、今や広範な規模で始まろうとしている。

村長は、「自衛隊の大がかりな配備は体制のあせりもある。瀬長島はほとんど村有地であり、契約・提供には決して応じない。新たな覚悟をもってこれにあたる」と語った。

また、村長は日本政府代表事務所駐在官・福沢一等海佐に防衛庁あての「返書」を手渡し、自衛隊配備と土地の提供にいっさい応じないことをあきらかにし、米軍基地の、村ぐるみの撤去闘争をたたかうことを表明した。

こくばん

私立大学を卒業してデパートに就職した友人がある。今度の参議院選挙期間中に、生まれてはじめて自民党候補者への支持署名をしたよ、と笑って話した。〇〇候補を支持します、と書かれた署名用紙が職場の机の上に置いてあって、ああ、それに署名しておいてください、と誰が言うともなく、そういう雰囲気があるのだという。別に書いたところでどうという意味もないから、まあまあと皆が記入しておくらしい▼××会社の社員という位置は、支払われるべき賃金というあまりにも確かな利害のために、封建社会の単位である〝むら〟のような構造を呈するようである▼具体性に根づいているようでいて、実は階級をボツられ抽象されている不幸。奥深く形成される不安は、暗部となることさえできずに徘徊する。一世紀をこえてつもる不信と絶望が、年ごとに暑い夏を贈るかのように。都市の地下鉄に放散されることのない熱量が鬱積する。ああ暑い。（晴）

理想 七月号 （No.458）
科学・哲学・宗教
常識・科学・哲学……上田泰治
神学と諸科学の関係……大木英夫
仏教と科学……田丸徳善
技術と禁欲……大江精三
科学・哲学・宗教……鈴木皇
文明の広範な伝播と宗教……山本新
「おもて」の解釈学再論……坂部恵
意識と自己意識に関する理論の諸問題……ヘンリッヒ（大野篤一郎訳）
価二〇〇円 〒二〇円

実存主義 56 地獄 価二五〇円 〒七〇円
〈ロロロ伝記叢書〉 ホーフマンスタール フォルケ／横山滋訳 B6変・六八〇円
佐藤朔著 近代詩人論 A5変・九八〇円
図書目録送呈 東京都新宿区赤城下町四六 振替東京七八三〇三 理想社

思想 7月号 A5判・二〇〇円
●哲学および社会諸科学の現代的な課題を多面的に追求する
社会科学の方法と人間学（上）[illegible]……山之内靖
社会学的実証主義の思想構造[illegible]……宮島喬
殉教の論理と蜂起の論理[illegible]……深谷克己
日本統治下朝鮮の高等教育[illegible]……阿部洋
無文字社会の歴史（二）[illegible]……川田順造
デカルトの敵（続）[illegible]……清水幾太郎
自由についての二つの考え方（下）[illegible]……小林善彦
ルカーチ思想研究の動向……平井俊彦
【思想の言葉】……鶴見和子

文学 7月号 A5判・二二〇円
●研究と創造活動をつなぐ現代文学の新方向を探る
南島歌謡の源流……外間守善
親鸞の思想形成における漢文作品の位置（上）……河田光夫
百人秀歌から百人一首へ……樋口芳麻呂
伊勢物語「狩の使」の段について[illegible]……鷲山樹心
永井荷風ノート[illegible]……坂上博一
漱石山脈……熊坂敦子
金史良・抵抗の生涯（9）[illegible]……安宇植
メルヘンにおける人間像……相沢博
【文学のひろば】……大岡信
《書評》安東次男著「与謝蕪村」……清水孝之

科学 7月号 B5判・一八〇円
●躍動する現代諸科学を的確にとらえ、その動向を示唆する
《巻頭》人間における[illegible]
《世界の変動帯・IV》ずれてゆくニュージーランド
準星の理論——銀河の爆発として
殺虫剤による生態系の汚染II
殺虫剤による野鳥の卵殻損傷と卵殻厚の変化……D.A.RATCLIFFE
E. ARTINの思い出II
《資料》GB[illegible]
《フォーラム》見当ちがいの"入試問題批判"……小野周

創刊号／7月15日発売
公害研究 学際的協力をめざして
●季刊雑誌 第一巻／第一号 B5判・64頁／三八〇円
発刊にあたって……都留重人
[illegible]

岩波書店
東京・千代田・一ツ橋 振替東京二六二四〇

臨職闘争　全学へ波及

全臨闘への組織化進む

理学部を先頭にして

理学部化学教室において開始された臨職闘争は全学臨職闘争委員会（全臨闘）に結集する労働者、学生の手により全学への拡大が目ざされていたが、工学部、人文化学研究所の臨職労働者がこの闘いに決起し、文字通り全学化への闘いの組織化が着々と勝ち取られている。

理学部においては六月二十五日の団交の確認書に基づき六月二十九日午後二時半より公開主任会議が開催され、六月九日の団交以来一方的に確認書を破棄し逃亡と居直りを続けていた加藤学部長の出席のもと全臨闘の激しい追及が行なわれた。

加藤学部長はこの間の逃亡に対する自己批判要求に対し終始居直りを続け、植物教室の定員削減に対しても植物教室主任の確認書（六月十五日、三項目要求を認める）に従ってすぐさま即時定員化を実施すべきであるにも拘らず「努力する」と答えるのみであり、またもや居直りを開始した。

次いで各教室主任に対し三項目要求（化学教室で認めた臨職の待過改善を全教室で認めよ／第二次定員削減に反対せよ／臨職を即時定員内化せよ／）を突きつけ地球物理、地鉱各教室主任から次の確認書を勝ち取った。

確認書

私は三項目要求を学部長と同じく正当な要求と思います。当面第一項目の化学が認めた定員内並待遇改善の実現に努力し、教室会議に主任の意見として提出します。

地球物理教室主任　山元龍三郎

第一項目の化学が認めた定員内並待遇改善、とりわけまだ残されている退職金の定員内並の実現に努力し、教室会議に主任代行の意見として提出します。

地鉱教室主任代行　亀井節夫

しかしこの間の全臨闘の闘いに対して一貫して敵対を続けてきた物理第一、第二教室は出席した田中正教室主任代行が全臨闘の追及に対し「①部長発令の臨職の事は扱わない。当面総長発令のみを問題にする②定員外職員だけが差別されているのではない。他に劣悪な条件に置かれている人もいる。そうした人達全部の問題として考える③臨職の立場はよくわかる。だから待遇改善については身分保障を考える④臨職問題は佐藤首相に言え」と答え、物理教室における職組執行部と一体となった、臨時労働者の闘いに対する裏切りがまたもや暴露された。

工学部、人文研でも

工学部においては六月十九日に臨職労働者が工学部長に公開質問状を出し工学部における闘いの火の手が切って落とされた。

この公開質問状に対し六月二十六日工学部長は「総定員法、定員削減は政府行政の責任だ」と巧妙にも責任を回避した回答を行なうのみであった。

七月二日この回答に対する「工学部臨職問題説明会」が土木四五二教室において行なわれ、出席した福井工学部長に対する激しい追及がなされた。福井学部長は政府の行政施策に一切の責任をなすりつけ全臨闘の自己批判要求に対しても口をつぐみ居直りを続けた。

また人文科学研究所においても臨職労働者の解雇攻撃がかけられており「①臨職員の定員化②臨職並みの労働を行なうパートの者の定員化③総定員法・定員削減粉砕」のスローガンのもと闘いの組織化が勝ち取られている。

経済学部

執行部確立できず

またも民青系の妨害

六月二十八日午後四時から法経五番教室で経済学部同好会臨時執行部告示による自治委員会が開催された。

経済学部闘争委準備会（以下E闘準）は、四月～六月期の大衆運動の圧倒的な成果（三回にわたる学生大会での勝利、四・二八、五・一九、六月の三波の長期ストの貫徹）を踏まえて、さらに緊急の三里塚駒井野第二地点強制収用代執行実力阻止闘争、佐藤・椎名訪韓阻止闘争体制の構築に向け、闘う同好会執行部確立を追求したが、二十五日の自治委員会と同様民青系自治委員の悪質な流会策動の中で結局、執行部確立までは到らなかった。

四時すぎ定足数に達した自治委員会は、臨執代表の議長により開会が宣言された。

直ちに民青系の代議員から「新規約に基づく自治委員の意志表示の仕方は、ゼミで討論しないとわからない。ゼミでの討論を保障するため、この日の自治委員会開催は適当ではない」という二十五日と同様の発言がなされた。

続いて、E闘準―臨執から、六月闘争の簡単な総括と、それを踏まえた七月～今秋期闘争に向け、早急に闘う執行部確立を訴える基調が報告された。

このあと、議長から、常任委員の立候補受け付けが発言され、E闘準から六名が立候補した。

民青系の自治委員は、これを無視し、信任投票自体を拒否したため結局、総数が定足数にわずかに足りず、この日の自治委員会も流会したわけである。

これは自らの執行部を確立できないことがあきらかとなった民青系の学生自治委員会の引き延ばし策動である。民青系学生次回は自治委員会の設定を三〇日にしようと提起したが、この日は佐藤訪韓阻止闘争に設定されている関係上、彼らの闘争敵対と逃亡が大衆的に弾劾された。

他方、E闘準―臨執側からは、自治委員の意志表示は、各委員の判断に任せられるものとして早急に闘う執行部を確立しようというアピールが繰りかえしなされた。

さらに、これまでの自治委員としての無責任さを自から暴露したにすぎない民青系の委員に対しては多くの委員から、その宗派的対応が大衆的に批判された。

医学部

教育課程改編に対決して

無期限スト貫徹中

医学部では、中教審路線実質化としての教育課程の改編に対して、四月十六日以来の四度の学生大会での決定にもとづいて、無期限ストライキが闘われている。そして学部長、新教育体制委員会の団交からの逃亡とあくなき闘争圧殺策動に対し、六月二十五日に学部長室―事務室二階の全面占拠闘争に突入した。医学部自治会、医学部闘争委員会のこの闘いに対して、学部当局は、広報十七号の配付などの分断策動、闘争圧殺をはかるのみで、今なお団交に応じようとはしていない。

医学部闘争委員会は、その間、平和台病院闘争、五条山病院闘争などの医療部門における闘いや、政治闘争に決起、各回生ごとの学習会やシンポジウムなどを連続して行なって、長期闘争の態勢を固めている。

また、医学部自治会が中心となって、九日に医学連関西ブロックの結成大会の開催が予定され、関西における医療戦線の強固な構築を目指している。

中教審最終答申と国大協の「大学改革構想」が相ついで発表され、その先導的試行が各大学における「自主改革」として貫徹されようとしている現在、三カ月に及ぼうとするこの京大医学部の無期限スト闘争は、全国的波及をもっていくものと思われる。

夜間デモ禁止など

警視庁　新たな弾圧へ

闘う労働者、学生を対象とした警備強化案を検討してきた警視庁は、二十四日、その基本方針をまとめ、国家公安委員会の了承を得た。これは、十五、十六、十七日を頂点に戦闘的に闘われた六月闘争の中でそれに恐怖した権力が、それを「極左暴力集団の、表現の自由とは無縁な法と秩序に対する挑戦」として、今後、デモ・集会の禁止や事前「検束」、職問の強化等々による、明確な事前弾圧の方向を打ち出してきたということである。そして早くも七・一佐藤訪韓阻止闘争では、この方向にそって弾圧が強化された。

基本方針のおもな内容は、①爆発物使用の具体的情報があるなど危険と認められる場合は、夜間、あるいは特定施設に近接した場所での、集会・デモは禁止をも含む規制措置をとる。②このような事態発生が予想される場合、その周辺での捜査・検問を徹底する。③現場を中心とする警備、広域交通規制を徹底し、現場への人・車の接近を防ぐ。④爆発物に対する警備部隊の部隊運用方法を検討し、訓練を徹底、防護衣・大ダテ・金属発見機・強力消火剤の開発にあたる―などである。

この「方針」の中で注目されるのは当局の判断のみによって夜間デモや重要施設周辺での集会・デモが禁止されることになるという点である。もちろん今までも予備検束や様々な事前弾圧は常に当然の如く行なわれてきており、またデモコースの許可権限は各公安委員会にあるため東京などでは〝明白な危険あり〟という理由でデモコースの変更、不許可をした例も多い。しかし今度の「方針」は国家公安委員会が了承したことで全国的な弾圧強化への波及力をもつといえるだろう。しかもこれは新しい法令根拠を設けずに現行条例の拡大解釈で行なわれる。

新型種の催涙ガス

6・15～17闘争で使用

去る「沖縄返還協定調印」実力阻止三日間連続闘争で使用された催涙弾は新型種であることが明らかとなった。

同闘争の負傷者の救援に当っている「東京救援連絡センター」は二十九日、「治療に当った被害者の検診結果からみて、警視庁の使った催涙ガスは、高濃度の新型種である」と発表した。

催涙ガスを浴び たため火傷度「二度」の重傷者が続出した。三十八度前後の熱を出し、リンパ腺がはれ、尿の出が悪くなるという症状が従来になく重い。

粉末状の催涙ガスを浴び逮捕された者のうちとくにひどい女子二人は、逮捕された翌日から発ジン、、水ぶくれができ、一週間目にじん臓 の働きが停止、尿が 出なくなり生命の危険な状態に入り入院した。

慈恵医大の井上医師は「患者は従来にない重い症状で、肝臓やじん臓障害をひき起しており、これまでと違って〝催涙ガス〟なのに涙が出ない。わかっただけでも三人の女学生が窒息し仮死状態で救急車で運ばれている」と語った。

これにみられるように破防法体制下の機動隊による〝警備〟は、闘う者に対する大量殺人行為が公然と開始されていることを告げている。

C自選挙終わる

民青系が当選

六月二十一日に告示され、二十八日から七月三日までの投票期間を設けられていた前期教養部自治会正副委員長選挙は、かろうじて、投票総数（登録数）が過半数を上回り、三日に開票された結果、教養部全学連連絡会議（民青系）推薦の立候補者が当選した。

全学連連絡会議は、「大学民主化、統一要求実現」を提起し、投票を訴えたが、大衆運動と区別された選挙運動に埋没してしまった。また、学生共闘は、「軍国主義と対決する真の自治会を」と活発に情宣を行なった。これに対して、教養部六月共闘会議は、6・14～23の十日間長期政治ストライキを自らのヘゲモニーの下で貫徹しきったことを踏え、「沖縄―三里塚を中心に、今後展開される政治情勢に対応し得る自治会」を訴えて、連日、集会を行なった。反戦会議はこれとは別に独自の候補者を立てていた。

開票の結果は次の通り。

投票総数（登録数）　二五五五
定足数　二五四四

正委員長候補

神谷（全学連連絡会議推薦）　一二三一
若林（学生共闘推薦）　四五八
中野（C六共闘推薦）　四三九
藤田（反戦会議推薦）　四一
白票一八二、無効投票二〇四

副委員長候補

羽場（全学連連絡会議推薦）　一一九九
堀口（学生共闘推薦）　四八三
丹羽（C六共闘推薦）　四一八
野村（反戦会議推薦）　五三
白票一八九
無効投票二一三

総じて、投票は不活発で、また白票や無効投票が二割近くもあった。

この選挙結果は、六月闘争昂揚後の組織化の決定的な不充分性を示すものであろう。また、巨大な潮流を巻き起こさんとしていた「返還粉砕」共同行動委が選挙に対し、独自の対応を行ない得ず情宣活動も行ない得ないまま、夏期休業をむかえてしまったことは、厳しく問われなければならないだろう。

同学会選挙も「開票」

現在、民青系学生が僭称している同学会執行部の選挙が、教養部自治会選挙と同じく、六月二十一日に「告示」され、二十八日から七月三日まで投票が行なわれた。

これに対し、文学部学友会、経済学部同好会臨時執行部、理学部、医学部、農学部の各自治会及び、文経、理、医、農、工、法の七学部闘連合、教養部六月共闘会議、看護学校闘争委は、「日共＝民青が僭称する同学会執行部の「告示」した同学会選挙をボイコットせよ！」と提起し、学内各所で、投票を呼びかけていた「選挙管理委」を追及した。

しかし「選管」は三日には、定足数に達したとして開票し、全学連連絡会議（民青系）推薦の候補者が圧倒的多数を占めたと発表している。

文学部、経済学部、三日までスト

6・15―6・17沖縄返還協定調印阻止闘争と6・23闘争に、京大では革命派の指導の下に教養部―七学部がストライキで決起したが、その後も医学部では四月十六日以来の無期限スト闘争が闘われており、文学部と経済学部では、佐藤訪韓阻止闘争に学部ストライキで決起した。

文学部では、六月十五日以来の長期政治ストが七月三日まで貫徹された。長期ストの中で、若干の拡散状況があったことは否めなかったものの、文学部闘争委員会―文学部学友会は、東京、三里塚への部隊派遣と、残留部隊の京都での闘いへの決起、反軍映画の上映や連日の政治討論会などを行ない、夏期休業以降の闘いへの組織化を進めている。

経済学部でも、六月十四日の学生大会決定にもとづいての波状ストライキの第三波が、七月一日から三日まで行なわれ、ピケットを貫徹するとともに、佐藤訪韓阻止闘争に決起した。

7.1　全京大集会

佐藤訪「韓」阻止へ

佐藤首相が韓国を訪れ、朴大統領の就任式に列席するという七月一日には「佐藤訪韓阻止・自衛隊訪韓、訪台阻止」全京大集会が、午前十二時から教養部正門前で、教養部六月共闘会議（C六共闘）、医学部闘争委、経済学部闘争委準備会、理学部共闘会議など六十名を結集して行なわれた。

集会は、経済学部闘争委（E闘）準備会を司会として、医学部闘争委・医学部自治会（M闘・M自）の発言に始まった。M闘・M自は、学部長室占拠によって闘争の新たな局面を切り拓き、また同学会を僭称し選挙をとり行なおうとしている民青を放逐したこと等の闘争報告を行ない、今後も断固無期限ストライキで闘い抜くと決意を表明した。続いてE闘（準）・E同好会臨時執行部が、佐藤訪韓・四ケ国閣僚会議の反革命性を暴露しこれを粉砕するとアピールを行い、次に、理学部共闘会議・理学部自治会が、四度の学生大会に勝利し、評議会選挙にも勝利したこと臨職闘争においては公開主任会議を勝ち取ったことを報告し、今後の闘いの決意表明を行なった。最後に、C六共闘が「佐藤訪〝韓〟阻止、三里塚闘争勝利」を訴えて、集会を終り、教養部構内と本部構内のデモを貫徹して、解散した。

教育シンポ開かれる

教育労働者を中心に

六月二十六日午後三時過ぎから、東京一ツ橋にある日本教育会館（日教組本部）講堂で、日本教育新聞労働組合主催、教育闘争支援共闘会議、専門紙労協・都教活後援による「教育シンポジウム（教育その擬制と復権）」が、約五百名の現場教師、学生、教育関連産業労働者などを結集して開かれた。

シンポジウムは、まず、日本教育新聞労組の直江副委員長から基調報告がなされ、それを受けて、さらに教育現場からの報告が行なわれた。

報告は、三里塚空港反対同盟少年行動隊、琉球新報記者、国士館学園闘争、夜間中学設置運動・麹町中学内申書差別事件、出版労協（教科書労働者）の闘いなどが行なわれた。

その後休憩を間にはさんで五十嵐良雄横浜国大講師、大河原日比高校定時制教師、村田栄一崎市立向丘小学校教諭からの講演が行なわれた。

次いで、会場参加者を含めた、討論に入り、横国大教育共闘、父兄、通信教育共闘、都教活、都庁労働者、から発言がなされた。

最後に都教活世話人柴田氏からシンポジウムのまとめが提起され、今後もシンポジウムの続行が確認され、シュピレヒコール、インターでシンポジウムは十時過ぎ終った。＝**七月十二日号教育闘争シンポジウムを参照**

七十年代戦線闘いぬく

攻撃としての参院選で

六月二十七日に投票された参議院選挙は、即日開票から地方区でも自民党の後退が目立ち二日後には全国区合わせて選挙の結果が明らかとなった。

今回の選挙は、72年沖縄返還をメルクマールとする日帝の沖縄へのアジア太平洋圏安保の適用を背景に、六月十七日に行なわれた調印式と秋に予定されている返還協定の批准の間に行なわれ、議会制ブルジョア独裁下での国民的合意のとりつけを狙ったものである。

そういった政府ブルジョアジーの政策に対し、社会党、共産党、公明党、民社党の野党は、「全面返還」「本土並み返還」といった帝国主義に屈服したスローガンの下方議会主義に埋没した。今回の選挙に現象した一定の社会党の増加は地方における社・公・民共闘関係の成功に依る結果であり、長期低落傾向をなんら脱却したものではなかった。

一に「三里塚・沖縄を闘う70年代戦線」から立候補した高見圭司氏は、労働者階級の利害を突出して断固闘かい抜こうとする、独自候補であった。

今回の選挙における高見氏の立候補は、帝国主義的大工場制度の確立に抗して爆発している全国各地の戦闘的エネルギーをさらに階級へと形成していくプロレタリア統一戦線―共同戦線の発展であり、多くの闘う人民の結集をもたらした。

帝国主義労働運動に抗し、日帝の深部に迫まり、ブルジョア政府打倒へむかう70年代階級闘争を勝利へ導く戦線が、議会をもその対象にとら得たことの意味は大きいといえるだろう。

京大新聞◇内容紹介

70年10月～71年4月

（バックナンバー有ります、1部20円）

十月五日号（一四一九号）…6面
【ニュース】三里塚測量阻止行動に決起【学園評論】10月闘争にむけて
報告レッドパージ〈第七回滝田修処分〉（編集部）▽総長会見
入管をめぐる諸課題／②〈民族〉の異質性に迫るために（編集部）
入管法―第一回・歴史的系譜（小野誠之）
反戦から反軍へ、反軍から叛軍へ②（編集部）
生活過程の落差を埋めるものは―「三里塚の冬」上映にあたって（編集部）
月刊「地域闘争」創刊によせて（編集部）▽コミューン10、11月スケジュール

十月十二日号（一四九二号）…6面
【ニュース】10・8闘争の地平を確認【学園評論】階級攻防戦の勝利へ
三里塚現地より（全学連現闘本部）▽公判日程表
入管法―第二回・法的諸問題①（小野誠之）
第一期叛軍闘争の総括と今後の課題（黒木睡）▽雑誌拝見／探検第12号

十月十九日号（一四九三号）…6面
【ニュース】佐藤訪米・国連出席阻止へ▽沖縄―現地ルポに向けて（編集部）
報告レッド・パージ〈最終回総括として〉▽入管法―最終回・法的諸問題②
ルポ中国／第一回・中国人民の日常（京大訪中グループ）
〈流民〉覚書―越境、そして越境の果てに〈上〉（寺沢正）
懸賞小説第一次選考評〈上〉（編集部）

十月二十六日号（一四九四号）…6面
【ニュース】10・21・鮮烈な突撃【学園評論】全学新大会に向けて
報告10・21闘争―東京その①（編集部）▽書評栗原達男写真報告
ルポ中国／第二回・教育革命①（京大訪中グループ）
〈流民〉覚書〈中〉（寺沢正）▽再び「民主に抗し」（立命館法学部評議会）
諸君の不安感が何であれ…（B・P・P国防相ヒューイ・P・ニュートン）
〈存在〉の解放に向けて（コミューン10・11月学生委員会）

十一月二日号（一四九五号）…6面
【ニュース】北富士米軍演習を阻止【学園評論】沖縄国政参加選挙粉砕へ
三里塚は何を語っているか（編集部）▽公判日程表11月
報告10・21闘争―東京その②（編集部）
ルポ中国／第二回教育革命②（京大訪中グループ）
入管をめぐる諸問題／③労働者階級の弱さの秘密として（編集部）
仏ゼネストの拡大と限界（インタナツィオナーレ・レヴォルツィオーン誌より）
懸賞小説第一次選考評〈下〉（編集部）▽〈流民〉覚書〈下〉（寺沢正）

十一月九日号（一四九六号）…4面
【ニュース】全戦線、闘争委に総結集【学園評論】十一月長期政治ストで
報告・北富士（編集部）▽アピール三原高校山下教諭の不当処分を粉砕せよ
（淡路闘争委員会）▽滝田闘争中間総括（十月行動者連合）ルポ中国第三回
医療革命（京大訪中グループ）
新たな労働運動の潮流を（京大病院労研）

十一月十六日号（一四九七号）…4面
【ニュース】11・15沖縄国政参加粉砕闘争【学園評論】11・22首都総決起へ
隊友反戦討論会・〝帝国主義軍隊〟の中から（元陸海軍自衛隊員）

十一月二十三日号（一四九八号）…2面
【ニュース】11・22総決起集会／11・15沖縄・投票ボイコット行動（現地特派員）
【学園評論】沖縄選挙粉砕闘争総括

十一月三十日号（一四九九号）…2面
隊友反戦討論会・第二回▽思想の自由な流布を（仏アナキスト連合）
パリ通信・ふたたび燃える闘いの炎（本紙パリ特派員）

十二月七日号（一五〇〇号）…40面
（記念特集）

十二月十四日号（休刊）

十二月二十一日号（一五〇一号）…4面
【ニュース】12・10代議員大会流会
レーニン主義とプロレタリア革命〈下〉（中原一）
いま解体しつつあるものは何か―非演劇論の試み（菅孝行）

十二月二十八日号（一五〇二号）…2面
【ニュース】全学新第二十五回大会を開催【学園評論】全学新大会総括
隊友反戦討論会・第三回

一月四日号（休刊）

一月十一日号（一五〇三号）…4面
【ニュース】コザ決起に騒乱罪適用さる／毒ガス移送、阻止できず
【学園評論】71年政治過程へむけて
進行する破防法体制とは何か①序（横川勉）

一月十八日号（一五〇四号）…2面
【ニュース】入管行政との対決を／日韓法的地位協定粉砕へ
ゴーデスベルグ綱領への道第二部①帝国主義社民の〈単一〉化（有田繁郎）

一月二十五日号（一五〇五号）…6面
【ニュース】全共闘の革命的再建を提起／二・四沖縄闘争へ各戦線で組織化
進む日産車体闘争アピール・ラインをとめろ！（全金日産車体工機京都支部）
沖縄ルポ・噴出する階級的エネルギー①コザで基地労働者と（編集部）
「入管」をめぐる諸課題①「入管体制」の鮮明化から（編集部）
進行する破防法体制とは何か②司法の帝国主義的再編（横川勉）
映評・ひとりぼっちの青春

二月一日号（一五〇六号）…6面
【ニュース】二・四をステップに沖縄闘争の高揚へ【学園評論】世界資本主義の危機　声明・同学会「執行部」の第二新聞策動を弾劾する（編集部）
報告　建築労働者の闘い（内藤建築事務所労働組合）▽ルポ沖縄・噴出する階級的エネルギー　②「復帰不安」の中で▽ゴーデスベルグ綱領への道第二部②（有田繁郎）
進行する破防法体制とは何か③私達をとりまく情勢（横川勉）

二月八日号（一五〇七号）…10面
【ニュース】各学部に闘いの炎あがる／全国全共闘再編にひとつの契機・2・4東京
三里塚・強制収用を前に決戦体制【学園評論】反帝共同闘争機関を
アピール・医学部闘争委／農学部林闘連／文学部闘争委
教会闘争からのレポート・靖国問題について（ナイト・コミューン事務局）
ルポ日産車体闘争①　▽ルポ沖縄・噴出する階級的エネルギー③沖縄労働者反戦
日本帝国主義と日本（狭間直樹）▽インドシナは君の工場の中にある・フィアット労働者の反乱

二月十五日号（一五〇八号）…10面
【ニュース】文学部・実力ストライキを貫徹／新病棟移転阻止・全学的共闘体制の構築へ
全軍労四十八時間全面ストを貫徹【学園評論】労学結合の課題
ルポ・日産車体闘争②▽アピール・完全入寮決定権の獲得へ（吉田寮闘争委）
われわれはここまできた・「淡路空港計画」事前阻止闘争の最終局面をむかえて〈上〉（淡路闘争委）
ルポ沖縄・噴出する階級的エネルギー④生産管理闘争（編集部）

二月二十二日号（一五〇九号）…8面
【ニュース】新病棟移転阻止へさらなる進撃／三里塚・二十二日から最終決戦へ
【学園評論】学内再編に抗して▽緊急アピール・直ちに臨戦体制の構築を（医学部闘争委）
ルポ「地域開発」の中を①（編集部）▽ルポ・日産車体闘争③（編集部）
われわれはここまできた・「淡路空港計画」事前阻止闘争の最終局面をむかえて〈下〉（淡路闘争委）
死の形而上学を生きるために・永山則夫との共同正犯▽書評・レーニンの今日的意味

三月一日号（一五一〇号）…6面
【ニュース】長期決戦過程に突入―三里塚／移転阻止へ攻撃的展開を・京大病院
【学園評論】三里塚へ総結集せよ▽アピール、新病棟移転阻止への最終局面をむかえて
この土地はわがものにあってわがものにあらず・三里塚決戦の中から①（編集部）
ルポ「地域開発」の中を②（編集部）
急使・演劇戦線①演劇戦線運動の原点（和田耕治）

三月八日号（一五一一号）…6面
【ニュース】三里塚、本格的地下壕へ・労農学の実践的結合へ
【学園評論】組織労働者への波及を―三里塚
この土地はわがものにあってわがものにあらず・三里塚決戦の中から②（編集部）
進行する破防法体制とは何か④治安維持法と破防法について（横川勉）
書評・天皇裕仁と作家三島由起夫の幸福な死

三月十五日号（一五一二号）…10面
【ニュース】移転阻止へ向けスト指令【学園評論】入管法上程阻止へ
報告・農経闘争から
出入国管理法・法務省案（全文）

三月二十二日号（一五一三号）…12面（合格者名簿号）
【ニュース】病院当局、機動隊常駐下で移転強行へ【学園評論】厳密な検証を―新入生へ
報告・林学闘争「下からの再編」を越えるものは（林学科四回生）
この土地はわがものにあってわがものにあらず・三里塚決戦の中から③（編集部）
資料・新しい「出入国管理法」案の解説（法務省入国管理局）
書評・寺山修司全歌集
入試統計・合格者名簿

三月二十九日号（一五一四号）…4面
【ニュース】移転強行に実力阻止行動・京大病院新病棟移転阻止闘争
総体性の方法的開示へ・活動総括、基本方針（編集部）
腐蝕の風土を撃て―戦後社会の構図そのものの解体に向けて（米沢功）
J・P・サルトル「民衆裁判」①（訳・大塚雅也）

四月五日号（一五一五号）…6面
【ニュース】三里塚・地下壕破壊に反撃／沖縄・急転する一体化攻撃
ルポ・「地域開発」の中を③（編集部）▽ドキュメント・三里塚闘争①（編集部）
「入管」をめぐる諸課題・出入国管理法粉砕へむけて（編集部）
書評・わが解体

四月十二日号（一五一六号）…12面〈新入生特集号〉
【ニュース】4・6三里塚、北富士連帯集会／マスコミ労働者に弾圧の嵐
前田総長との会見【学園評論】「沖縄決戦」体制の構築を
ドキュメント・三里塚闘争②（編集部）
東大裁判闘争の現段階・五～六月統一控訴審獲得にむけて（三宅鴻郎）
J・P・サルトル「民衆裁判」②
新入生諸君へ・平井俊彦／似而非物語・池田浩士／「近代」との百年戦争を・田端英夫

四月十九日号（一五一七号）…10面
【ニュース】全軍労、県労協統一ストを貫徹／医学部授業ボイコットに突入
【学園評論】四・二八ストから協定粉砕へ
進行する破防法体制とは何か⑤司法の帝国主義的再編そのⅡ（横川勉）
ドキュメント・三里塚闘争③（編集部）
J・P・サルトル「民衆裁判」最終回▽書評・ローザ論集
新入生座談会

四月二十六日号（一五一八号）……六面
【ニュース】沖縄決戦過程へ―四・二八へ
コザからの手紙　ドキュメント・三里塚（最終回）（編集部）
叛軍闘争の課題（小西誠三曹講演）
プロレタリア革命における軍事問題（永野洋明）

人文・社会科学良書の店

京・三条河原町北（バス停前）
ふたば書房
TEL 231―9507

本店　千本上立売北（電停前）
TEL（代表）461―8855
駅店　新京都駅近鉄名店街
TEL681―0880／691―9955

逆叛への招待　売切れ
序章 2号　売切れ
序章 3号　300円　〒80円
・暴力考……滝田　修
・世界革命運動の現段階……八木健彦
序章 4号　300円　〒80円
・中国革命と革命の哲学……藤本進治
・反スタ主義の止揚と現代革命……八木沢二郎

序章　5号　5月15日 発行　350円　〒80円
＝特集・アジア革命と世界赤軍＝
■武装闘争と建党・建軍の諸問題……八木健彦
■帝国主義的人間の変革……倉地一行
■ベトナム労働党万歳……福田隆之
■〈無物〉とのたたかい……吉田富夫
アラブより想いをこめて・パレスチナ通信……重信房子

京都大学出版会
京都市左京区吉田　京都大学構内
TEL（075）771―8111（内）2448
振替 京都 27536

ゴーデスベルグ綱領への道

第三部

―帝国の国民統合運動と総評・社会党分裂期の労働者運動―

有田越郎

最終回

新"秩序派"連合の登場と左翼の解体・再編過程

今こそ闘う〈統一〉の旗を掲げよ

学生、労働者人民が三日間におよぶ死闘をくり返した首都において、「調印式」を強行した政府ブルジョアジーは、今回の参議院選挙を、国民的合意の取りつけとして擬装させ、その結果に対する政治的利用を目論んでいた。

一方、市民としての生活闘争を掲げ、階級闘争を圧殺し、労働者階級の利害を議会内において握りつぶす中にしか、自らを位置付けえない各野党は、"反自民ポーズ"をとりながらも、その反プロレタリア性を露呈している。

今回は、参議院選挙にみられた状況分析を踏まえ、前回でもふれられた、「ファシズムか革命か」が問われている現在を、70年代階級闘争の歴史的飛躍を賭けて闘う各戦線の結合にむけて、革命的労働者党とは何か、それがいかに創設されるべきものなのかといった提起を受けて、最終回としたい。

（編集部）

一、飼育された議会内反対派と議会制ブルジョア独裁の爛熟

沖縄返還協定への国民的合意の偽装としての参議院選挙攻勢は、開票と同時に結果に対する政治的利用を通して一層露骨に押し進められつつある。

人間の感覚をも管理下におさめる〈フィーリング時代〉はコンピューターへの物神崇拝を産み出し、科学的情報管理の名において、国家権力の政治的意志を〈国民的合意点〉に完全にすりかえてしまったのである。限定付の回答、恣意的設問が計量的に処理される「客観的妥当性」が産まれるというのである。

今日の社会のもっている矛盾の鋭い表現としてある公害、物価は全政治勢力の〈緊急な国民的課題〉であり、社公民共闘のイニシアの下で〈議会内協議事項〉として、早急に政府与党との合意を勝ち取って実行力のある対策を構ずべきである。などということが、今回の参院選の政治選択を決定づけたことになっているのである。

いったい無過失責任制による公害対策、独占の管理価格を前提とする物価対策、日米安保を前提とした中国対策というが如きものは、ブルジョワ行政機構の下への議会の包摂とブルジョワ審議会としての議会＝調整機能の整備、すなわち諸階級・諸階層の利害を議会に封じ込めて行く以外のなにものであろうか。

こうして今、議会は合意の強要の下にますます「民主化」され、飼育された反対派の発言を大きくとりあげることによって、その形式上の権威を高めようとしているのである。

社会党は五議席増、民社は結党時に復元し、共産党もまた院内交渉権を確立し、公明党は社公民共の政治的イニシアを握り、自民党は失った議席と引きかえに反対党から争点を奪った。政府与党の政治支配能力の減退を議会制ブルジョワ独裁の一層の爛熟をもって乗り切ろうとするブルジョワ政治委員会は、鉄鋼連盟の藤井丙午を公然と登場させ、民間重要人物の発言という姿をとって、公害の無過失責任制のキャンペーンの布陣を張り、自民党田中幹事長の如きは、政権を担当し得る連合政治勢力としての社公民共闘の成立に共産党も協力をするように不破哲三に呼びかけるにまで至っている。（六月二十八日夕刻）

六〇年代は、安保をめぐって自動延長、段階解消、安保廃棄の三つのブロックがなかんづく、安保継続の自民対安保廃棄派の社共共闘が基軸となり、ＩＭＦＪＣの伸長を足場にする右翼労働運動の流れに足もとをおびやかされながら日韓条約の締結を契機とする帝国主義労働運動の本格的登場の時期までこの対抗関係の構造は持ちこたえてきたのである。

一九六八年社会党第31回大会は、参議院選挙の敗北を受けて、安保廃棄政府樹立に向けての中期路線を大幅に修正し、多角的共闘の名による〈野党連合構想〉と〈社共共闘〉の継続のブリッジ方式を採用したのである。多党化傾向と呼ばれる野党の拡散と総評民同のナショナル・センターとしての機能喪失、こうして迎えた野党第一党の〈神話の崩壊〉によって「社会主義への過渡としての社会党政権」は「安保廃棄を通告する政府」へと置きかえられたのである。

もとより「革命の過渡をなす政権」が平和裡に移行するはずもないのであるが、この時、革命の側に立とうとする〈心情〉すら放棄したのであった。反戦派排除の闘わざる〈七〇年闘争路線〉はこうして敷きつめられるのである。

「かくして、安保廃棄通告をする政府の実現へ、すべてはこのアラジンの魔法のランプからはき出され、魔法のランプの中に吸い寄せられていく、呪文は〈多角的共闘〉なる言葉である。廃棄通告の野党連合政府とそのためのテコになる大衆運動の中軸に社共共闘の奏の調和、こんな美しいエンタシスはギリシャの遺跡を永遠に掘り起こしても決して発掘されないだろう（略）確かに引裂かれた二つの構想、すなわち、労働戦線統一論者と社共限定共闘論者とが同席して日本社会党中央執行委員会は構成されている。だが〈破産するのを承知で発言する〉というＩＭＦＪＣ派の沈黙をいかに受けとるべきかは重要である」（根拠地第二号）とかつて私は書いた。

六九年の日米共同声明前後の過程はすでに拙稿の第一部の冒頭に触れている。簡単にふりかえってみると、日米共同声明の直後に行なわれた衆議院選挙で首都で二議席に転落した社会党の内部では議員懇を先頭にする"左翼狩り"と帝国主義社民が公然と登場し、安保廃棄闘争への本格的敵対が開始され、これに呼応して七二年の労働戦線の統一と民社党からの〈帝国主義社民の単一化〉への攻勢が開始されたのである。

70年代戦線
縄三里塚

「70年代戦線」はいたるところで人々に闘いを訴える。

そして特に注目すべきことは、民社党の内部で村上派、江田派とだけ、すなわち社会党の右派を分裂させて統一新党を作ろうとした部分が佐々木良作らの大連合党派に封じ込められたことである。

さらに時間的にはすこし逆のぼって、六九年の選挙に先立って初めて財界人と公然たる懇談を行なった公明党は〈中道革新連合〉を打ち出していたことである。

第32回社会党大会は反戦青年委員会からの招還と反戦派党員の排除を決定し、プロレタリア独裁を否定、資本家救済の党へと転身したのであった。この夏開かれた共産党大会は不破書記局長の下で、野党連合政府への参加もあり得ることを示唆するに至った。

ソ連、中国を資本家の使者として訪問した成田、石橋は十二名の革命的党員の除名を確定した第33回党大会であたかも帝国主義社民に対抗するようなポーズを取りながら野党連合の下に共産党を包摂し切る任務をもって党機関を占拠するのである。

西村の死後、民社党委員長代行となった佐々木良作は、最近開かれた中央執行委員会において、社会党の再建によって江田派が困難な位置に立たされたとして「二党一派連合から人脈でなく党を問題にしなければならなくなった」として、江田派を通じての働きぶりから、石橋を交渉相手とする共闘、従って問題別による共産党との共闘を含みとするものに党の意志を持って行き、「少々時間をかけても労働戦線の統一と野党連合を一挙的に進める」方向を固めている。

成田＝石橋ラインが「反戦を排除し、野党連合に対する江田派の対応を押えた、主体性堅持に対する国民的信頼の回復」といかに強弁しようとも、長期低落傾向脱却の虚像はすでに明白である。京都、大阪における奇妙な勝利を首都における木村、市川の落選は、大分、島根栃木、のみならず、社公民ないしは社・公、社・民の協力態勢によって辛うじてそれがなされたことを雄弁に物語っている。議席をめぐる調整と協力は、六〇年いらい密月のつづいた社共の間でも不成立だったのである。

七〇年六月、公明党竹入委員長は中道革新連合構想を打ち出しが①各党の政策協定②連合③国民が求める政界再編がその内容であり「安保早期廃棄」「沖縄協定反対」など左翼ポーズを取りつつ、〈人のつながりより政策のつながり〉へと民社党をも引きずっている。四月の統一地方選のあと「今、社共共闘と一緒に進むと破局的な事態が起る」と口をすべらせた矢野絢也も「成田委員長の"全野党共闘だって、実現性を欠いた"夢の共闘"にすぎない。これでは野党第一党としてイニシアチブ、責任がとれない。石橋書記長などは、パターンをはっきりすべきだ、といっているようですがね。ただ、社会党も、この一、二年変わってきていると思います。イデオロギー過剰体質から現実的な主張が通る党になってきた」（毎日新聞七月二日朝刊）といっている。〈暗黙の部分を政策レベルに高めていく新しい段階〉とはいかなる段階であろう？〈選挙協力〉から〈政策調整〉まで行ってきた〈政経分離〉の公明党は何を目指しているのであろうか？今や〈暗黙の部分〉白日のもとにさらされつつある、すなわち反佐藤＝中道革新連合がそれである。長い一本のルビコンの橋が、4州をまたいで架設されようとしている。共産党から公明党までと、公明党から財界までの二つの地点、そこに向ってブルジョワ議会はガン強な橋桁になろうとしている。

そしていまルビコンの橋に向かう土堤の道をゴーデスベルグ綱領と大連合政権に向かって社会党はひた走っている。そればかりではない。日本共産党中央委員会は翻訳の誤りだとして〈プロレタリア独裁〉を否定、かの悪名高い二段階革命路線すら〈社会の仕組をかえる〉という言葉に置きかえて、その後を必死で追っている。

かくして長い暑い夏が迫っている。七月三十日から五日間にわたって開かれる総評定期大会に向けて七日に拡大評議員会が開催されるが、七月一日の幹事会は、七一年運動方針の第一番目に、「生活闘争を定着させ、市民組織との結びつきを強め、国や地方自治体の政策を転換させる」との生活のための政策転換闘争を打ち出している

二、逃亡を追認する労働戦線

かつての炭労の政策転換闘争がそうであったように、生産点の実力闘争を〈市民の同情を集めて〉〈議会内の政策の争い〉に歪少化し、労組出身の代議士によって政府とのボス交を成立させようとする闘争が先頭を飾るに至ったのである。そして〈議会内の多数派工作〉としては〈野党連合〉が、労働界の絶大な〈交渉力〉としては〈労働戦線の統一〉が要求されることになるのである。

参院選に政党支持問題が修正、追加された。すなわち「政党と労働組合の関係については、社会党を中心とする革新勢力を強化する展望に立って、政策を中心とした協力関係のあり方について検討を開始する」というのである。因に全民懇の幹事会は一日午後、東京・渋谷の東京電力健保会館で次のような協議を行ない、総評大会の前日に総会を開催すると発表した。それによると「今度の参院選で反自民の社・公・民協力が全国的に定着した」と評価し、①十月メドに「全国民労協連絡会議」を発足させ、②減税、土地行政、賃金問題など労働界に共通する諸問題で共闘を図るよう働きかける③さらに社公民三党の書記長を招き、三党協力を中心とする「大胆な政権構想」などを要望する予定となっている。

そして秘密会議を裏付けるかの如き、労働戦線の統一でも原案を修正①賃金、定年制延長、週休二日制など労働条件の向上には、企業を越えた労働条件の"横断化傾向"があり要求の共通性が広がっており②高令者問題、医療、住宅、税制、公害など生活面での要求は一層深刻になっており、労働側の幅広い団結による政治行動力の高まりが必要である――としているのである。

この"横断化傾向"とは、闘いの底上げ的平準化によってもたらされ、かつての低賃金構造打破の闘争などとは異なって、資本の側の産業再編＝産業合理化に対する敗北の結果なのであって、これを産業別統一闘争を基軸にした全労働者階級の闘争の方向ではなく、労働戦線の統一を条件とする〈交渉力〉の回復を通して産別労使協議制の方向へねじ曲げようとするものである。

日米安保条約廃棄、沖縄全面返還
沖縄72年
アメリカのインドシナ侵略反対、佐藤内
日米安保条約をただちに廃棄せよ！

労働者にとって生活防衛の闘いもまた生産点で闘わざるを得ないのであって、階級として行動する主体を欠落させるところに、〈市民との〉あるいは〈市民としての〉生活闘争を押し進めるのだとすれば、階級闘争の解体以外のなにものでもない。総評は今や民同的"戦闘性"すら解体されつくそうとしているのである。ブルジョワ政府の政治的支配能力の減退――武装解除した労働者階級――無力な革新政権――革命の横取を狙う中道勢力の台頭。

こうして〈ワイマール〉と〈ファシズム〉の道が今、着々と準備されつつあるのだ。

三、七〇年代反帝共同戦線構築のために

三、七〇年代反帝共同戦線構築のために

沖縄返還協定への同意の偽装としての参院選攻勢を真正面から受けて闘い抜いた「七〇年代戦線」は、一三五、六二〇票の獲得にとどまり、ついに「議会にゲリラを」送り得なかった。運動の未成熟を痛苦に自己批判しなければならないであろう。東京、神奈川等では当選ラインを突破し、大阪、兵庫、広島で前進し得たこと、千葉、埼玉で着実な波及が見られることは、福岡、愛知における潜在勢力を顕在化し得なかった選挙技術上の弱点にもかかわらず太平洋ベルト地帯に戦闘的労働者の新たな台頭の条件が作られつつあることをはっきり示している。能力の限界にはばまれた全国的傾向の中で京都の四、八六二、長崎の一、五〇七も低い数字ではない。全国平均四割を越える議会へのニヒルな対応を突破し得なかったわれわれは今あらためて、棄権が、逃亡が消極的な抵抗たり得るのかを問われている。左翼が議会に独自候補を押し出して闘い抜く以外にも革命的対応はあり得るし、それを否定するものではない。それにもかかわらず、反選挙ないしは反議会主義の組織だった運動展開が皆無であったことは充分注目しておかなくてはならない。

ボイコットと、逃亡の同じ外観にこめられた内実の決定的な相異点をどこで顕在化させるのかが鮮明にされない限り、対抗セクトの政治的伸長をチェックするといった無傷なものにとどまりはしないだろう。

議会をボイコットすることが決定的な力を持ち得るためには、労働者・人民の権力が対抗的、二重権力的に自己形成されていることが前提でなくてはならない。どのような法案が議会を通過しようと、その施行を実力で阻止し得る多数者としての労働者・人民の〈マハト〉が構築される、すなわちプロレタリア・ソビエト運動が、革命的労働者党とプロレタリア統一戦線を基軸にする反帝共同戦線の下に押し広げて行くことを抜きにしては、ブルジョワジーの議会制独裁の背後に進行する議会と労働組合を貫いて押し進められて行くボナパルティズムと、その破局を絶好のチャンスと待ち構えているファシズムに勝利するプロレタリア独裁＝プロレタリア・ソビエト革命の展望は立ち得ないだろう。

革命か、ファシズムかが問われる時代にすでに突入したのみならず、場所的・時間的な現在となる直前にまで到っている今日、その時期を新"秩序派"として乗り切ろうとする護憲勢力、それと対抗関係に立つかに見えて反ファッショ人民戦線へとこれを蚕田しようとするスターリニストが、かの革マル派を、早稲田本学から追放したことを他山の石としなければならない。この傾向を「革マル派がおそまつである」と言ってそのことが状況と無関係であるかの如く捉えることはできない。

すでに前回でも触れたように、革命か、ファシズムかが問われる時代にあって、諸階級・諸階層は連合政治勢力となり、その連合政治戦線が自己が政権にありつく時期をめぐって対抗関係に突入したのである。

六月二十六日、東京新宿、大阪東口で展開された日共スターリニストと「七〇年代戦線」との〈物理的衝突〉は、人民戦線の背後からこれを食破って登場せんとしてきたプロレタリア・ソビエト運動と、これを押えきることによって始めて〈疎外された革命〉を偽装し得るスターリニストとの文字通り血みどろの激突を予兆させるものがある。

スターリニストの武装は本質的にプロレタリアートへの戒厳令のための武装である。歴史的にそれがブルジョワに立ち向かったことがあるにしても、それはプロレタリアートが自立的に立ち上がる前に〈権力〉を手に入れようとするに他ならないのである。代行主義は〈革命の横取り〉という言葉に置きかえられなくてはならない。状況の構造としては〈ファシズム〉と同じ位相にあるのだ。彼らもまた野党連合の内部での公明党の動向に警戒を強めているが、それは階級的警戒心とは異なっている「泥棒こそ、泥棒にもっとも鋭感である」と言ったたぐいのものでしかない。

公明党は佐藤打倒後の連合政府の破綻の時期にファシズムへの転身の照準をあて、ますます左翼ポーズを取るであろう。スターリニストもまた倒閣エネルギーを活用しつつ純化された独自組織の打ち固めに狂弄するであろう。今こそ、プロレタリアートはこれに打ち勝つ党―統一戦線―大規模な反帝共同戦線に向かって進まなくてはならない。

そして今、革命的労働者党とは何か、それがいかに創設されるべきかが問われている。まさに〈ノンセクトラジカル〉という悲しげな名称をもって、「親はなくとも子は育つ」とばかりに歩み出した〈状況の子〉がつきつけている新左翼既成党派への〈破産証明書〉を恫喝をもって破り去ろうとする第二、第三のスターリニストは、今日の傾向性においてそうであるばかりでなく、情勢がにつまればにつまるほど代々木への先祖帰りをするであろうことも同時に見ておかなければならない。

議会へのニヒルな対応が、それにとどまるならばさして有害ではないのであるが、それがプロレタリアートの成熟への不信につながっているなら、分解のすえにブル転するか、状況を見ない情念の疾走として結果的に〈プロパガードル〉の役割を背負わされてしまう以外にないのである。

プロレタリア・ソビエト運動はこれを突破しなければならない。告発―反乱―革命の「七〇年代戦線」はいま、その呼びかけを終えた。〈闘いはいま始まったばかりである〉選挙の二十三日間は〈直接的交通形態の確立〉であった。統一戦線と単なる課題別共闘を越えた「反帝共同戦線」との関連は、未成熟な〈党〉および〈統一戦線〉が大衆闘争の鉄火の中で、社民、民同分裂期の分派闘争の中での〈対抗組織〉の確立ということによって生じた〈組織体質〉を洗い直し、状況それ自身の直接の要請に答え得るための決定的な場所としていくことである。同時に、学生運動、青年運動の領域に〈世代的運動〉の外観を固定してきた全「新左翼」に共通な限界を突破するための、すなわち言葉の厳密な意味における〈革命運動〉の飛躍を問われる階級闘争総体にとって、「七〇年代戦線」に結集し、自律的に前進せしめて行くことは全闘争の結合と全プロレタリアートによる全国機関としてのプロレタリア権力樹立にとって極めて重要である。

〈党のための〉〈赤軍創設のための〉などの〈非合法闘争〉に名をかりた一切の大衆闘争からの招還主義と大衆物理力主義を越えて、今こそ闘うものの〈統一〉の旗を高く掲げなくてはならない。

本稿を終るにあたって

「ゴーデスベルグ綱領への道」に、ルビコンの橋が架設された。四月統一地方選挙で日本のビルゲル・マイスター（革新首長派）が渡って行った。そして今、〈社・公・民協力〉と〈労働戦線の統一〉が、すなわち調整機関としてのブルジョワ議会の爛熟と労資共同決定方式が、ますます動かしがたい現実になりつつある。

こうしてかの「ヨーロッパの社民時代」と呼ばれた六〇年代中期の状況に近似しようとする現在、本稿の作業につづいて「ヨーロッパの社民時代」の分析、とりわけ西ドイツ、イギリス、そして破産した人民戦線のフランス、イタリーを鮮明に対象化しておかなければならないと思う。このことを、私自身の新しい作業の予告としてだけではなしに、共同作業のテーマとしても提出しておきたい。

「前途は明るい、だが、道はまがりくねっている」

（おわり・ありたえつろう氏は労働者革命研究会会員）

京都大学新聞
縮刷版 全巻 ついに刊行

昭和史・京大とは何かを問う者に必読の書
大正14年創刊号より全紙を収録

●体裁　各巻Ａ4判レザークロス張　金文字入
平均900頁（本文870頁　索引・年表30頁）

全6巻　完結！

詳細については事務所へおたずねください。

発行

発行所　京都市左京区吉田本町京大構内　京大新聞社
京都大学新聞縮刷版発行委員会　TEL（075）761－2054

京都大学新聞縮刷版発行委員会編

プロレタリア革命の軍事問題

K・コーリー『軍隊と革命の技術』評注

一五一八、一九号の二回にわたり、われわれは「プロレタリア革命における軍事問題」（永野洋明＝労働者革命研究会）を掲載し、いわゆる軍事問題への関わりを開始した。この問題をわがものとして見据えている読者であれば、すでにわれわれの軍事問題に対する基本姿勢は了解されているものと考えたい。

一方で「兵站なき軍事」批判が提出されている。それが闘う人々のきわめて真摯な衝動に根ざすものであることも、われわれは承知しているつもりである。しかしなお、あえてわれわれは軍事問題の物象的把握による労働者階級本隊の疎外、敵対を弾劾する。

いまわれわれがはじめるのは、階級武装―プロレタリア正規軍の建設―へ向けた歴史的検証とそこから抽出される今日的課題の整理である。

書物の「評注」という形態をとって作業を開始することに、迂遠さを感じないわけではない。しかし、われわれを含めてこの国の階級運動はいまだ革命的蜂起を正規軍の解体においてなしえてはいないのだ。このことに起因する軍事のブルジョア的理解の蔓延を、くり返しわれわれは排除したいと思う。

（編集部）

三枝 匠

上

武装蜂起の成功に向けて

史実に見る正規軍解体の成否

基本的立脚点

「プロレタリア革命における軍事問題」に関するわれわれの基本的認識は、われわれとの討論をふまえた上でさらに一歩進めて整理された永野洋明氏の論文に余すところなく示されている。

ここでとりかかる作業の前提はこの論文に基礎をおく。とりわけ次の点はこの評注の中心軸である。

「革命的軍隊の建設を自国の帝国主義軍隊の解体の中からなしとげることを放棄している路線は、自らの路線のまがっちた総括の上に立っているものである。

世界中のどこをさがしても、基本的には、自国支配階級の軍隊の解体の中から武装を獲得して行くもの以外に革命が成功した例はない」

（永野論文は、本紙一五一八、一五一九号掲載）

本著の構成

本著「軍隊と革命の技術」は、一九四三年、イギリス婦人キャスリーン・C・コーリーが発表したものである。彼女は、いわゆるイギリス型教養人、読書人であり、政治学ないし歴史学、ましてや軍事学の専門家ではない。しかしながら、彼女の読書量の尨大さと頑学は、意外といっていい分野でまことに優秀な著作を完成したのである。

本著における「革命」の語義はかなり広い意味で用いられており、十七世紀「市民革命」に始まりスペイン市民戦争に至るヨーロッパ、アメリカにおける内乱、市民戦争、革命が立論の領域である。

本著の構成は十二章と結論からなるが、一～十章は「政府・軍隊・人民という三つの勢力間の諸関係を、革命に先行する時期と叛乱の進行際中の時期について検討」を加え、十一、十二章では「革命政権の地固めと軍隊」について、主要にフランス革命、ロシア革命の成功とスペイン市民戦争の失敗の史実を比較し、軍事的側面の成功の秘密を明らかにする。―

『軍隊と革命の技術』目次

第一章 軍隊と国家
第二章 叛乱とその諸条件
第三章 不成功に終った叛乱
第四章 正規軍とのたたかい
第五章 軍隊の態度について
第六章 敗戦の効果について
第七章 軍隊と内発的不満
第八章 フランス革命
第九章 軍隊と人民の親密化
第十章 軍隊の政治的性格
第十一章 革命政権の地固めと軍隊
第十二章 革命政権の地固めと軍隊（続）
結 論

岩波現代叢書・所収

（太字は今回評注分）

われわれにとっては、ロシア革命の勝利とスペイン市民戦争の敗北の軍事資料を漁るだけで事足れりといえるかも知れない。しかし、こうした拙速はかなり部厚な本著を読めばまずほとんど消し飛んでしまう。無論、われわれが見据えることがらは、プロレタリア革命における軍事問題である。しかし、革命に対する反革命の軍事的諸表象は純力学的に革命の軍事を規定するのであり、その物象的表象を拒む者はすでに「革命」それ自体を放棄したと断ぜられるを得ない。その意味では、たとえばフランス革命における人民の勝利は、パリ・コミューンの敗北以上の軍事的内容を疑いなく有しているのである。

評注1 ■ 軍隊と国家

〈正規軍の叛乱軍に対する技術的優位――叛乱は正規軍が全力をあげて攻撃するときには失敗する〉

徴兵制であるにしろ、志願兵制であるにしろ、政府の側からすれば常に、軍隊は感情なき道具、人格なき道具であらねばならない。この正規軍掌握の鉄則が実際上、どの程度貫徹しているかを正確に知ることは、叛乱の成否に関る。

正規軍が科学技術の先端で武装されている今日、叛乱軍に対する優位性は歴然としている。叛乱軍の制約――財政的貧困、武器の隠匿、貯蔵の困難、大部隊の訓練不能。さらに国内的叛乱は、革命派と反革命派を区分するラインは人民の複雑な諸階級の間に引かれるのであって、地理的ユニットを持たず、各地の蜂起は、既存の交通形態を持つ政府によって各個撃破される。（国内叛乱が地理的ユニットを持った例は、アメリカ南北戦争、スペイン市民戦争）

正規軍が銃器、大砲を持つようになったことは、叛乱軍との物理力的な懸隔を大きく拡げたが、それに反比例して兵卒一人一人が持つべき技倆の差は決定的要因ではなくなってきた。今日の機械化軍隊に対してこの見解に疑問符を打たれるおそれに応えておけば、高度工業化社会ではとくに、工場労働者が習得している技術は、軍事上必要なそれと段階的区別性はないのである。

次のことも重要である。訓練され、技術的優位に立ち、かつ政府に忠実な正規軍に対しても、市街戦型叛乱は緒戦において勝利しうる（一九〇五年モスクワの例）。ただしそれは、政府が本格的な戦争手段を決意しない間、すなわち戦車、大砲が使用されない間に限られる。（ローマ共和国、パリ・コミューンなど）

評注2 ■ 叛乱とその諸条件

〈革命的蜂起の正しい選定――長期的好機選定と短期的好機選定――最大の好機としての敗戦〉

パリ・コミューン、ロシア革命の事例は、革命的蜂起が成功するための要件の最も確実な組み合わせが、敗戦の最終段階において与えられることを証明している。

自然発生的大衆蜂起と計画的蜂起という叛乱の二大類型の、指導部による見事な統御の事例は、ロシア革命における三月と十一月の史実を見ればいい。

革命派にとってこのことは、当然ながら「戦争を期待する」ことにはならない。そのような階級闘争の物化は愚劣の極に位置する。

問題は、蜂起の成功に関る好機の選定判断を前衛が持ちうるほどに成熟しているか否かにかかる。軍隊の解体が即ち武装蜂起の成功につながるのではない。ここで、敗戦時の日本の前衛の誤謬にみちた情勢把握を持ち出す必要はあるまい。

評注3 ■ 不成功に終った叛乱

〈叛乱が軍事的挫折を予想されたばあいにすら、それらは革命側の立場に立ってみれば、革命の長期的戦術における一つの重要な要素でありうる〉

典例として、一九〇五年モスクワの蜂起があげられる。重要なことはこうである――蜂起は、またあまりにも遅すぎた。しかしそれによって、ごく少数の不退転で一身を顧みない人びとが、短期間ではあっても政府を危機に陥れることができること、そしてもしこの期間が十分長期化されうるならば、長期的反抗という事実自体が、事態の進行全体を変えさせる力をもちうることが示された――

革命的蜂起の民族的規模の経験の有無が、その国の階級闘争に与える影響の大きさを、残念ながらわれわれは認めなければならない。しかしながら、このことは「早すぎる蜂起」の先行が、来たるべき革命の不可欠の前提であるなどということではない。このことの妥当性は、一にかかって、闘争の展開―敵の出方、革命派の成熟度とのみ関る。

評注4 ■ 正規軍とのたたかい

〈一定の好条件があるばあいには、比較的少数の戦闘的革命家団体でも、正規軍にたいして戦をいどむことができること、そしてそのような戦はかなりの成功の機会をもつ〉

アイルランド・シン・フェイン革命は正規軍との戦いで革命軍が勝利した例である。その勝利から導かれる条件は次の通り。

(1) なんらかの理由で、敵対する軍隊が全力発揮を阻まれるばあい。

(2) 住民一般が革命勢力に同調し、それに秘密裡の援助をあたえる心構えにあるばあい。

(3) 叛乱組織の統制が完全で作戦計画にそって動きうるばあい。

(4) 軍事行動を、敵側の市民と軍隊の士気を衰えさせるような具合に、長期にわたって尻上りに大規模に遂行できるばあい。そして軍事行動を、その社会構造と地形とが、叛乱者たちを迅速に隠してしまうとともに、敵軍を孤立した群に分散させることが多いような地方で遂行できるばあい。

シン・フェイン革命を典例として採用する理由は、年代的な新しさ（同例としてのアメリカ独立戦争は、エピソードとして語るべき内容はあるが、教訓化するには諸条件が異なりすぎる）とともに、イギリス政府ならびに政府軍の対応が巧劣両面にわたって〝現代的〟といえるからである。つまり叛乱鎮圧に登場する正規軍の対応は、五〇年後の今日でも、おそらくこの程度である。叛乱の鎮圧にあたって正規軍が使用しうる武器はおのずから限界があり、それはシン・フェイン革命の時代から本質的差異を生じていない。――当時の正規軍が、パリ・コミューンに対するチエールほどの爆撃ができなかったことは記憶しておいてよい。

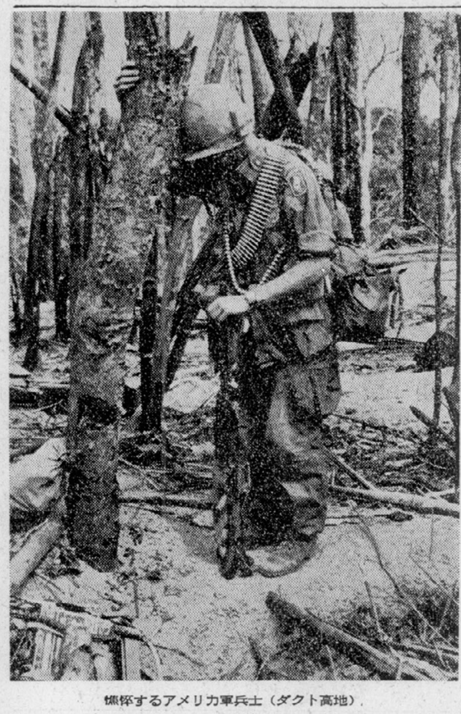
シン・フェインの叛乱の技術は、テロリスト戦術（英人高官、将校）とゲリラ戦（初期は警察、後期は運輸・交通組織）の結合である。――その今日的展開は、ゼネスト・山猫スト戦術とゲリラ戦となるだろう。

ゼネストと武装叛乱の問題は、史実に関する限り、かなり悲観的材料が多い。それは概略次のような構図をとる。

ゼネスト↓（産業マヒ、日常生活の圧迫）↓中産階級の離反↓労働者階級のみの武装叛乱↓正規軍による鎮圧。

そして厳然たる次の法則がある――およそ、正規軍が、純粋に労働者階級だけによってなされた示威行動を鎮圧するにあたって、大幅に任務を放棄したという事例は存在しない。

ゼネストと革命的蜂起は、先進国プロレタリア革命の根本的戦略であることは、示された数々の悲観的史実にもかかわらず、疑いのないことである。ここですでに、われわれの前に横たわる最重要の問題は設定されるといえよう。



憔悴するアメリカ軍兵士（ダクト高地）

評注5 ■ 軍隊の態度について

〈軍隊が公然とは革命的蜂起に参加することはないが、しかし軍隊全体の態度あるいは軍部の中枢部の態度からして、時の政府が軍隊に対して、既存体制の防衛を託するにたる信頼を寄せえないと判断するような状況を作り出しえたら、革命派は十分な成功の希望をもって叛乱に踏みきれる〉

軍部―軍隊に見はなされた体制側の反撃力の喪失は、軍隊における反体制感情と量的比例関係にあるのではなく、心理的な気力喪失にすぎないのだが、歴史の示すところによれば、それは致命的結果をもたらせている。

軍部―軍隊の反体制悪感情において、時の政府において最も「危険」なのは将校―将校団のそれである。兵卒は出身階級の如何を問わず、かなり最終的段階まで受動的に将校に盲従すること。将校団叛乱は歴史的に見て、まったく進歩的体制への反革命か、あるいはファンシスト叛乱かであること。この二つの点は、冷静に知っておくべきことがらである。

そして、将校の政治的感情の昂進は、将校団に武力という独占的属性を仮借なくふり回させるものである。弱体な政府（典型的には社民政府）――無政府状態にあっては、力こそ正義であり、力はこの段階では将校団に帰せられるのである。（三〇年代日本、イタリア、スペイン）

評注6 ■ 敗戦の効果について

〈左翼からの革命が、軍隊の抵抗を打破するには、下士官と兵隊が戦意を喪うことが生じなければならない〉

将校団は自らの利害の所在をつねに政治的に意識しているが、兵隊たちが自分の心に発生した政治的熱情を原因として、自分自身の発意よりして解体することはほとんどない。

したがって、弱い政府の軍隊をファシストが手中におさめるのは容易であるが、兵隊の解体には、自発性以外のより強力な溶解剤が必要である。

その溶解剤の最も強力なものは、いうまでもなく、国家的規模での敗戦もしくは、敗戦的状況である。顕著な例は、一九一七年のロシア、一九一八年のドイツ―オーストリアである。

この溶解剤の威力は、現代戦争の帝国主義戦争、総力戦争、人民抑圧戦争という性格によってますます強くなっている。圧倒的な機械化軍隊であるにもかかわらず、米国徴兵制軍隊が解放勢力の攻勢のまえに、大規模な解体現象を起こしているインドシナ戦線を思い起こしてほしい。局地戦であるにもかかわらず、そして、戦闘継続状態であるにもかかわらず、戦線離脱、戦意喪失（麻薬常用など）が相ついでいる。米軍、サイゴン政府軍の大敗北となった今冬のラオス戦線では、多くの兵士が脱走のために、自らの手榴弾を自軍の将校に投げつけたという。

使命感をかきたてられるような大義もなく、まして、自国ブルジョアジーの利害のためにのみ戦わされている米軍兵士がこのような解体状況に容易に陥るというのは、戦争がもたらす種々の心理学的諸要因をマイナスしても納得できることがらである。

帝国主義戦争の特色として、政府＝ブルジョアジーが、「敗戦」よりも「自国のプロレタリア革命」の方を恐怖するという点が挙げられる。このことは、すでに一八七一年の普仏戦争の敗北とパリ・コミューンの成立におけるチェール国防政府以来の常識といっていい。一八七一年三月十八日、モンマルト丘の大砲がパリ国民軍の手から奪いとろうとしたヴェルサイユ軍は丸腰のパリ市民に包囲されて武装解除された。このときチエールは、二十四時間以内に正規軍を叛乱市民に感染させないために、全正規軍をパリから撤収させ、反革命体制の政治的、軍事的建て直しを、敵軍相ビスマルクとの共同謀議のもとに企り「血の五週間」へと突き進むのである。チエールの反革命の嗅覚の鋭さを示す数多くの事例のひとつである。

これにひきかえ、一九一七年の春から秋にかけて、ロシア臨時政府は最も革命的な雰囲気の強いペトログラードに帝政打倒の最先端に立った守備兵団を放置し、十月革命を「許して」しまったのである。

軍隊の解体＝革命的工作を行う場合、とくに帝国主義軍隊の解体は実質上将校団の粉砕に他ならない以上、将校・下士官・兵隊の構成を数量的、質的（イデオロギー出身階級など）を分析しておく必要がある。当然のことながら戦時の将校の比率は低く（兵隊に対して、一対二〇ないし二四）、平時のそれは高い。日本の帝国主義軍隊＝自衛隊の将校比率は、したがって極端に高いはずである。徴兵制を布いたときにそなえて。

すなわち、小西三曹の決起の革命的意義を高く評価するとともに自衛隊にあらぬ幻想を抱かぬことである。

敗戦の場合は当り前として、勝利の場合にも、国民一人一人が獲得する「平和」は痛烈な幻滅と疲弊に反転する。ファシズムの側も革命的左翼と同じように、チャンスを持つのである。そして、ファシズムの方が、軍隊工作の有利さにおいて、他方を抜いているということ、このことを忘れてはならない。

評注7 ■ 軍隊と内発的不満

〈軍隊内における勤務条件の具体的不満も、軍隊崩壊の動因であること〉

平時の軍隊の解体＝革命的工作の困難性は、一般に理解されうることであろう。

しかし、平時の軍隊の解体こそむしろわれわれにとっては、リアルであるはずだ。歴史的に見れば、勤務条件に関する具体的不満も深刻化すればかなりの崩壊効果を持っている。ロシア革命における軍隊崩壊の副因は明らかにされている。

具体的不満の発現の仕方。

(1) 慢性的不満状態が政府に対する忠誠と軍律を弛緩させ、政治的危機の重圧によって軍隊が解体する。（イギリス市民革命、フランス革命）

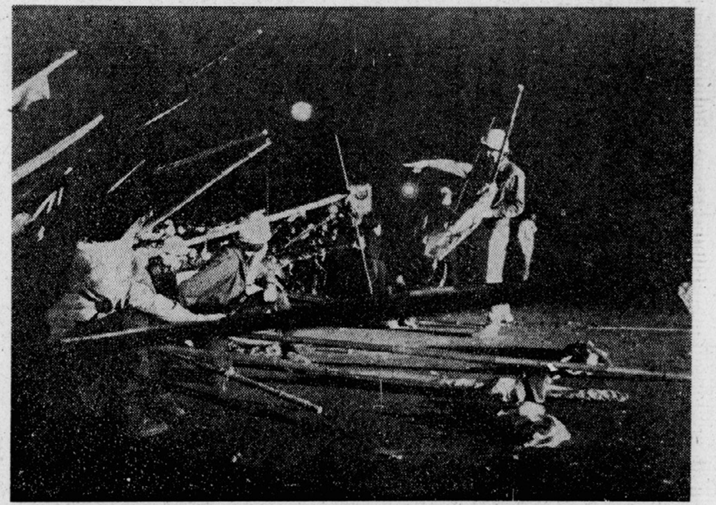
(2) 政治的側面をもつと否とを問わず、また民間の革命的蜂起とはなんらの関係もなく具体的不満が突如として軍隊内の爆発となって噴出することもある。（一九三一年。インヴァーゴードンのイギリス水兵叛乱）

わが自衛隊では、最近、勤務時間外の上官に対する敬礼解除とか兵舎内のバー開設とか、とみに近代化されているようである。昨年三島由紀夫が自刃した際のアジテーションに示されたファシストの危機意識は「政府による兵士の不遇」に向けられている。彼が、意外にプラグマチックな要素をもっていたことを示している。

インヴァーゴードンの水兵叛乱の際、その原因の些細なこともあるが、イギリスの労働者階級はたいした関心を示さなかった、という。このことはわれわれが、反軍兵士小西三曹にまさに、「孤立無援の決起」を強いたことを思えば、他人事ではない。小西三曹の決起の日まで、われわれは自らの闘争の波及を願望することはあれ、自衛隊への革命的工作など思いもよらなかったと言って過言ではない。

平時における軍隊工作の基本は、ともあれ軍隊と一般人民のあいだに接触、提携を確保し、軍隊の不満を革命的プロパガンダに結びつけることに他ならない。

さらに、軍隊叛乱という、まさに天与の贈物が手に入ったとき、そのときこそ、革命派は蜂起突入の判断を、正確に下さねばならない。



評注8 ■ フランス革命

〈フランスの兵士が一般人民と接触するに当たって、特別の機会に恵まれていたこと。革命自体が長期間にわたって進展したことによって、一方では、軍隊が完全な崩壊をこうむることなしに、革命側に移動することが可能となるとともに、他方では、革命の指導者が軍紀の再建と革命的情熱の啓蒙とを、同時に結合して行なう方法を考案する時間的余裕と機会とを与えられたこと〉

市民革命からジャコバン政府成立に至る過程での、サン・ジュストらジャコバン・クラブによる軍隊（当時、反革命包囲網と戦闘状態）の革命教育の努力は、軍隊の革命的工作の模範である。

これは、一九一七年ロシアにおいてはより困難な条件（将校団の敵対―モスクワ、もしくは逃亡―ペトログラード）のもとで、ボルシェヴィキによって見事に検証されている。

革命がフランスやロシアのような形で進行するとき（無論両者は相等しくなく、これは全く機械的な表現であるが）、旧体制を支持しなかった軍隊において、将校は政治的前進を停止し、兵隊の間では軍紀弛緩が蔓延する。

このことは、われわれの前に、いまだ極めて仮説的ではあるが、蜂起のスケジュールを提示しうる意味をもつ。

（つづく）

新古・カメラ在庫・豊富
カメラ買取・交換・金融・歓迎
キネヤカメラ店
京都三条大橋西詰 TEL (221) 4153

軌跡
★井坂正美遺稿集
ここに一つの生と死の記録がある。これは彼（井坂正美）の履歴ではない。死者に所謂リアリズムは無用だ。この生と死に意味を与える事は誰もできない。ただ苦悶とも言得ぬ死者の意識に逆流するイメージを読みとるだけだ。
□取扱店 京都―ふたば書房 京都書院 三月書房 大阪・ウニタ
京都市左京区岩倉大鷺町51
同志社大学大成寮旧館内
井坂正美遺稿編集委員会
TEL 791―6625

《新発売》 なめらかな書き味に若さをプラス モンブラン伝統の技術から生まれた新製品モンブラン・カレラ
カートリッジインク6本及びコンバーター付き、新開発特殊鋼ペン ¥2,500 14Kペン ¥3,000 （軸内にスペアカートリッジ共カートリッジインク2本が格納できます）
MONT BLANC Carrera
モンブラン カレラ
お問い合わせは 東京CPO BOX 1851K宛にどうぞ
インクのつめ替えはカートリッジで万事OK

46年度版 京都大学卒業者人名録 の御案内

予約申込み受付中！
◎予約実費 2,000円
◎予約締切日 8月31日
振替用紙(京都8203)にてお申込み下さい。
整理の都合上なるべく早くお願い致します

46年度概要

収録数	卒業生8万余名
年度	46年3月卒業生まで
索引	個人・総索引
版型	B5版 1,200頁

＊お届けしました原稿用紙は出来るだけ早く御返送下さい

誌上名刺交換・賛助の御案内
◎誌上名刺交換
卒業者相互間の交流に最適
スペース 1/9頁 12,000円
◎賛助 一回 10,000円
詳細は京都大学名簿編纂委員会までお問合せ下さい

44年度版販売中！
B5版 1200頁
44年3月卒業生まで集録

京都大学名簿編 委員会
京都市左京区吉田京大構内
京都大学学生課教養掛気付
TEL (075) 771―8111 内線 2448